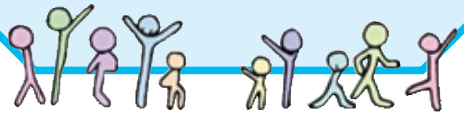
# 留学生の目に映る『千と千尋の神隠し』

国際コミュニケーション学部
高村　めぐみ



私は、これまで外国人留学生に日本語を教える仕事をしてきました。日本語教師は、日本語を教えるのみならず、日本文化も教えることが大切だと思っています。それは言語と文化は切っても切り離せない関係だと思うからです。

日本文化を教える方法はたくさんありますが、せっかく勉強をするのなら留学生が楽しいと思ってもらえるような方法が良いと思い、日本映画を紹介して、その内容や感想を一緒に話をしたりすることがあります。日本映画の中には､海外でも有名なものがあります。クロサワ、キタノは、特にヨーロッパでは有名なようですが、全世界で愛されているのは、なんといってもジブリ映画でしょう。

私もジブリ映画を見ますが、ジブリが大好きな学生は、私なんかよりもよほど詳しくて、多くの作品を何度も見ています。よく名前が挙がるのは､『となりのトトロ』､『もののけ姫』､『ハウルの動く城』､『崖の上のポニョ』などですが、知名度も人気も一番高いのは、『千と千尋の神隠し』だと思います。

『千と千尋の神隠し』は 2002 年の作品で、まだ生まれていない人もいるかもしれませんが、見たことがある人もいるのではないでしょうか。あらすじは、両親と一緒に、10 歳の少女・千尋は新しい引っ越し先に向かうが、その途中で奇妙な街に迷い込む。そこは、人間が行ってはいけない世界であったが、両親はそこのルールに従わなかったため、豚にされてしまう。一人ぼっちになった千尋は、奇妙な世界の住人に助けてもらいながら、両親を人間にする方法を探る・・・というものです。

私が、留学生と「千と千尋」の話をしているときに、「この作品は日本っぽいな」「日本文化を学ぶのに良いな」「日本のことを深く議論できる映画だな」と思う点がいくつかあります。今日は、私の感想と共に、それを書いてみたいと思います。

## １．銭湯、風呂文化

まずは、日本文化代表格の銭湯、風呂屋から。当たり前ですが、一言で「外国人」と言っても出身はざまざまですし、また、日本人の中にも、銭湯や温泉は好きではないという人もいます。それと同じように、銭湯や温泉が好きな留学生もいれば、絶対に入りたくないという留学生もいます。しかし、私の感触では、比較的、銭湯・温泉好きの留学生の方が多いように思えます。銭湯・温泉はちょっと…派が「他人と同じお湯に浸かるなんて信じられない。汚い！」というと、銭湯・温泉大好き派の人が「お湯に浸かる前に、きちんと髪も体も洗うし、タオルは湯船に付けないから、全然汚いことなんかない。プールよりもよっぽどきれいなんだ！」とルールやマナーを語りながら、風呂文化の擁護をしてくれます。そこから、日本ではどうして公共浴場が発展したのだろうか、いつごろからあるのだろうか、なぜ日本人は温泉が好きなのか、という話になったりします。

## ２．八百万の神

一神教の世界から来た留学生にとっては、日本には驚くほどたくさん神がいることに驚くようです。しかし、たいていは一人くらい日本の宗教やアニミズムに詳しい学生がいて、神道のこと、仏教のこと、いろいろと説明をしてくれます。留学生の話を聞いていると、つくづく日本は、「まったくの無宗教の国」というわけではないのだなと思います。

## ３．「川」の存在

あの世とこの世を分けるのに「川」が出てくるのは、日本だけでなく、他の国にもあるようです。しかし、国や地域によって微妙に違って

いて、その話を聞くのが面白いです（確か、大男が川に架かっている橋を揺らす、という国がありました）。

**４．千尋が両親とともに興味本位で入った街**

千尋のお父さんが説明していますが、作品のはじめの方で、バブル時代に作られたテーマパークが朽ち果てている場面が現れます。この場面から日本のバブル経済のことを説明してくれる学生がいると、「経済のことまで学べるなんて、とてもお得な映画だな。」と思います。

他にも畳の部屋や、千や風呂屋の従業員が着ている服、建物の様子、街並みなど、日本の文化や風景を知るのに、多くの情報が詰まっていると思います。

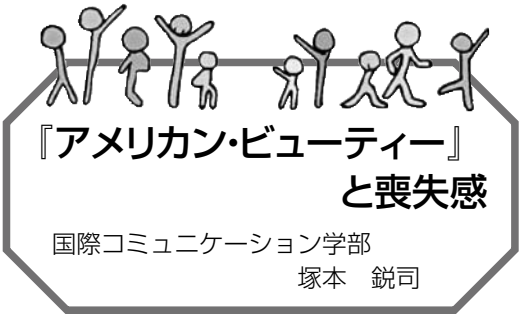
以上が、留学生が日本文化を学び、考えるのに良い映画だなと思う理由でした。

最後に、私が留学生に聞かれて、答えに詰まった質問をいくつか挙げておきます。みなさんが留学生に聞かれたら、何と答えますか？
調べると答えがわかるものもあるので、興味がある方は調べてみてくださいね。

Q: 千尋は10歳とのことだが、少し子供っぽすぎやしないか？ ／ 千は10歳とのことだが、とても勇敢だと思う。自分の国の10歳の子供は一人では何もできないが、日本人の子供はみんな、あれほどまでに勇敢なのか？

Q: 鳥居の赤には魔除けの意味があると聞いたが、冒頭の引っ越し先に向かうシーンに出てきた鳥居は、なぜ赤に塗られていないのか？

Q: 食べ物屋でお父さんが一番初めに貪り食っていた食べ物は何か？ おいしそうだから食べてみたい。



# 『アメリカン・ビューティー』と喪失感

国際コミュニケーション学部
塚本　鋭司

『アメリカン・ビューティー』は、それまでイギリスやアメリカで舞台の演出を手がけていたサム・メンデスが、１９９９年に初めて監督した映画作品である。この作品はアメリカの中流階級の白人家族のあり方や彼らの価値観をうまく描写している。１９９０年代中頃までは、アメリカの白人は肌の色を持たない、人間の原型のような存在として扱われた。しかしながら、１９９０年代中頃以降から、白人であることはアメリカ社会において重要な意味を持つとの考え方が広まった。そんな文化的環境の変化が起こっている時期に制作されたのが、『アメリカン・ビューティー』である。

都市の郊外に住むレスター・バーナムは、四十二歳で広告会社に勤めていて、中流階級に属している。彼の妻であるキャロリンは不動産業をしており、家を売るのに必死だ。彼ら夫婦にはジェーンという高校生の娘がいるが、彼女は両親に対して距離を置いている。ジェーンは、父と母が仲が悪いのにもかかわらず、娘に対して良き両親を演じているのが鼻持ちならない。ある日、ジェーンの通う高校で、バスケットボールの試合が行われ、ジェーンはその試合のハーフ・タイムにチア・リーダーとして踊ることになっている。母であるキャロリンは、夫のレスターを誘い、高校に行く。ハーフ･タイム･ショーが始まる直前に、彼らは高校の体育館に着く。幸い、ジェーンがコートで踊っているところを観ることができたが、レスターはジェーンと一緒にコートで踊っているアンジェラに魅了されてしまう。彼はアンジェラが胸元からバラの花びらを跳び散らかすかのような妄想を抱く。レスターは心の空虚さを埋めるために、若